島を訪れた人

人は日常生活のすべてから開放されて、旅に出たいと思うことがある。田舎の人は都会へ、都会の人は田舎へ、寒い北国の人は暖かい南国へ、海辺の人は山野へと、できるだけ日常環境から離れた異郷の地にあこがれる。住んでいる所と、違いが大きいほど感動も多いものである。

東京の女学校時代の友四人がやって来るというので、十日も前から妻はなんとなく落ち着かない様子である。私も否応なしに家の内外の掃除を丹念にやらされた。

かつては、還暦ぐらいまでの命で、孫の手をひいてお宮参りしているうちに余生が終っていたのに、昭和初期に生まれた彼女らは、九州はおろか、海外まで旅をする元気さである。

ある記録によると、お寺の埋葬帳を調査したら実に七五％が五歳未満の埋葬であることが記録されている。明治・大正になっても、その傾向は続いている。その頃は十歳まで育つのが大変であり、多くの者は幼くして、あの世へ旅立ったのである。医学が発達していなかっただけでなく、貧しさが大きな原因ではなかったかと思われる。衛生や、清潔の習慣も少なく、保健への関心も薄かったようである。

四千年前の人類の平均寿命は十八歳だった。昭和二十年の統計を見ると、日本人の平均寿命は四十九・八歳、人生五十年に充たなかった。それがなんと現在は、人生八十年の時代になったのである。たった四十年間に三十歳も延びたことになる。もし寿命が、毎年一歳ずつ延びたらどうなるか、いまの若い人達は、永久に死ねなくなってしまうのではないかと、ちょっと心配になる。社会も混乱するのではないか。そのようなことを妻に話したら、呆れたような顔をして「あなたは長生きする」と苦笑した。

かつては定年退職の頃に合わせて、寿命のつきる人が少なくなかった。人生五十年時代は家族も短い間だったから、一生懸命親孝行することができた。人生八十年時代になると、定年から二十年以上も生きなければならない。喜んでばかりいられない気がする。老いた両親の世話で、家族も疲れ果て、お嫁にゆけないオールドミスが増えるのではないかと気がもめる。

女性の過去にたいする記憶力の正確さに、驚かされたことは何度もある。女性は男性とちがって必ずむかしを大事にする。

「明日は何の日だったか、憶えていますか」と妻から言われるとドキッとする。結婚式がいつだったか、結婚前にどんな約束をしたか、むかしラブレターでどんなことを書いたか、そんなことはすっかり忘れている。

戦前の東京の下町の暮しについて、古いアルバムを見るように懐かしさで、妻は少女の頃の日々の記憶を時折私に語る。田舎育ちの私にはすべて未知の世界であり、童画を見るような感じである。

彼女らがやって来る当日は、風もなく空は晴れた。旅行は天候に左右される。ほんとうによかったと妻

は喜んだ。接待準備に忙しい妻に代わって、唐津駅まで出迎えるのが、きょうの私の役目である。四人の女性の写真を何度も見せられた。都会育ちの洗練された、なにかは感じたが、驚くほどの美人には見えなかった。

駅の改札口で四人連れの女性を見つけ「東京からですか」と声をかけたら「いいえ」と首を横にふられた。改札口の駅員も去り、ちょっと不安になりかけた時、笑顔で四人組みがやって来た。私が前の四人連れに間違って声をかけるのを、陰で楽しんでいた気配があった。六十になっても、なおこの茶目っ気に私はいささか参ったが初対面の固さはとれた。

わが家までの車の中での三十分は、自然の風景に対する感歎の声が殆どであった。東京育ちの彼女らは真新しいビルなど見向きもしない。古い裏通りや、護岸工事をしていない川や海岸に人気が集まった。真っ青な秋空と美しい雲と、なだらかな稜線を描く山々に「温かみがある」「気持ちがやすらぐ」と声をあげた。

東京は高層ビルの林立で、どこもアスファルトだ。都心で土の出ているところはない。人間よりも寿命の長いはずの樹木が、バタバタと枯れてゆくのが今日の東京の姿である。

わが家に、足を一歩踏み入れると、もう私の出番はない。幼い頃の思い出、近況報告、昭和初期に生まれた彼女らのたどった道は、戦争と無関係ではあり得ない。小波のように沸き上がるくすくす笑い、沈黙、そして哄笑、和気あいあいとした雰囲気が拡がっているのが、隣の部屋にいる私にも判った。権力や貧富の差に惑わされることなく、真実をみつめる目、物事を公平に判断するバランス感覚のよさに、私は驚き

に近いものを感じた。

島内一周を終えた彼女らは、大山展望台より眺めた大小の島々や海岸線、白い雲、今山神社の自然林に感動を覚えたと語り、東京での生活では味わえなかった、小さな地域社会の住民同志の仲間意識、人間のふれあい、人情というものを改めてしみじみと感じた、ともらしていた。

一本の木を切る時に、同じ木を育てるには、また何年もかかるということを私が意識するようになったのは近年のことである。いったん失った自然を取り戻すためには、大変な努力と長い時間がかかる。人間が自然をこわすときは、必ず何かの利益を求めている。利益の大きさが、便利さが、自然を失うことのおそろしさを忘れさせるのである。自然本来の姿が維持されていると、心安らかに散策を楽しむ気にもなるし、夜の空の月や星を仰がずにはいられない心境にもさせられる。

高速道路が発達し、自動車は山間地を矢のように走る。都市化の波に農村も洗われてゆく。島の海岸にもポリエチレンの容器、プラスチック、ビニールのフロシキなど、種々雑多な物が流れよっている。

晩年は田舎の豊かな自然の中でゆっくりと過ごしたいとよく人はいう。実際は、歳をとって田舎に引っ込んだ人に聞くと、寂しくてしようがない、生活が不便だという。そうなるのを知っているからこそ、現実には歳をとっても都会に住みたいという人の方が多いのである。積極的に都会にいて、やるべき仕事、やりたい遊びでもたくさんあるという人が増えているのである。都市に長く住んできた人ならなおのこと、都会の便利さは身にしみて知っている。培ってきた人間関係もある。住み慣れた都市を離れて、いくら景色がよいからといって、簡単に移住はできない。田舎に住んで、貧しさの中で、楽しみを発見することは、

なまやさしいことではなく、一種の才能がいるのである。いい芝居が見られないことは、どれほど辛いか、いろんな美術展や音楽会と、無縁になることは、生活にどんな意味を持つのか、趣味のいい衣服がないことは、どんなに淋しいか、それらは下らないことのように見えていて、実は意外と重大なことではないだろうか。淡白な山菜料理にはすぐ捲き、歌舞伎や洋画が見たくなり、野暮な衣服は身につけたくないに違いない。

列島改造論以後、海だったところが陸地になり島が消えたり川が消えたりしている。親の敵のようにむかしの面影を消しているのである。むかしのままであるべきだとは勿論思わないが、面影まで消し去るのは、なんともわびしい思いがしてならない。自然をコンクリートと鉄とガラスに変えることが、あまりにも多く、やせ細る自然の緑をなげくのは、老い近き者のいっときの感傷なのであろうか。

かわりゆく生活、遷りゆく世相、今後、人心、物質の交流はいっそうはげしくなるだろうが、郷土福島の持つ素朴な住民性だけは失いたくないものである。

佐賀県のキャッチフレーズは「人情の産地」である。わが郷土を訪れる人々に、心なごむような素朴さを、島のキャッチフレーズにできないものであろうか、と思うこの頃である。

唐津市に住む画家で歌人のSさんから、次のような便りがあった。

昨日突然知人にさそわれて、福島へ参りました。漫然と花を尋ねての遊びでしたが、田舎、田舎を回って、最後に波多津へ来たついでに福島まで足をのばしました。ところが車のガソリンが切れそう

になり、福島の町を方々さがしたのですが、生憎日曜のこととて、どこも休みで困り果てました。仕方なく駐在所におすがりしようと行ったのですが、これ又お留守でした。ほとほと困り果てて、郵便局の近くの三叉路の角にオートバイ屋さんがありましたので、どこかお知りあいでもありませんか、とお頼みしたら、あちこち電話をして休日の一軒にご相談して頂きました。その上自分で遠いところを先導して店の主人に頼んで下さいました。一時はどうなることかと思いましたが、ほっといたしました。

一日花を尋ねまわって、最後の福島で美しい人の心に接して、すばらしい、忘れ得ぬ一日となりました。なおその若い人は、波多津の桜の名所を教えてくれましたので、行って見ますと、実にすばらしい老木の桜がありました。

かねがね福島は椿の島として、あこがれていましたが、その椿よりも美しい人の心の花も咲いていたのかと、深い感動に胸を打たれました。

突然で失礼と思いましたが、先生の住む島にこんな美しさを見ましたので、先生にもお礼を申し上げたく、一筆したためました。

うるわしき人の心を島に見ぬ花尋ね来し旅のはたての